「親心」

エペソ人への手紙４：１６
March.17.2024

エペソ人への手紙４：１６（パワポ）

Preface

親にとって、生まれた子どもが成長しないこと程、心配なことはないと思います。

私の母は４８年前、母の年齢３７歳の時に、母にとっての第一子の私を生むこととなりました。
今でも、３７歳での第一子の出産は高齢出産の部類に入るようですが、４８年前当時は、ある意味危険な高齢出産でした。
いよいよ母の陣痛が始まり病院に運ばれたものの、「このまま出産を続けると母子ともに死んでしまう可能性があるので、胎内にいる赤ちゃんの命を諦めて欲しい」と医師から宣告されたそうです。

父は、医師からのその宣告を聞き、怒って家に帰ってしまいました。
そして、ヤケ酒を呷っていたところ、病院から電話が掛かってきて、赤ちゃんが無事生まれ、母子ともに健康だという知らせが届きました。
喜んで、父はバイクに飛び乗って、病院に向かいました。
そこでお医者さんが父に話してくれたのは、「赤ちゃん自ら、お母さんのお腹の中から出たいと、生まれてきました。医者としてしたことは何もありません」という言葉でした。
そうして付けられた名前が、豊かに、平和の和で、豊和でした。

使徒パウロがガラテヤ書１：１５で、「しかし、母の胎にある時から私を選び出し、恵みをもって召して下さった神が」と告白していますが、私自身イエス様を信じさせて頂いた者として、「このいのちすべて神のご計画であった」と告白するしかありません。

そんな風に生まれて来た私は、両親や上の四人の兄や姉たちの家族にとても大事にされたように思います。
ところが、一つ問題がありました。
それは、食欲がないということです。
（今では考えられないことですけれども…）
生まれて来てから母乳はそれなりに飲んだようなのですが、離乳食に切り替わる時からは、食べ物をパタッと食べなくなってしまいました。

今でも鮮明に覚えているのが、２歳頃か、３歳頃か、家族皆で夕食を食べて

いる席で、せっかく食べたご飯をゲロゲロっと食卓の上に吐いてしまい、幼い私は吐いてすっきりしているのに、私以外の家族は皆あたふたしている様子です。
　いつもは食べないのに、その日に限って良く食べ、家族みな笑顔になっていたのを覚えているのですが、結局吐いてしまったことに、父が怒ったことまで覚えています。

　また、夜中に高熱を出して、バイクに乗った父の背中におぶられ病院に行く途中に、父の背中にこれまたゲロゲロッと吐いてしまったことも、なぜだか覚えています。
　そのような具合いだったので、幼い頃の私の体は骨と皮だけで、ほぼ栄養失調のような状態で、頭ばっかりデカかったそうです。

　「この子は無事に育つのだろうか」と心配した両親は、韓国の親戚に相談をして、漢方薬を飲ませることにしました。
　５、６歳頃だったと思うのですが、苦くて苦くてたまらない真っ黒な漢方薬を１ヶ月間、無理矢理泣きながら飲まされました。
　漢方薬の内容は、たぶん鹿の角と高麗人参とナツメみたいなものだったと思います。
　すると、その漢方薬を飲んだおかげなのか、みるみるうちに食欲が付き、結果、こんな風になってしまいました。
　今では、「漢方薬なんか飲ませなければ良かったのに！」と思うほどに、食欲が中々衰えません。

　そんな私を育てた母は、自分自身ひもじい時代に生まれてきたうえに、やっと生まれてきた子供がずっとガリガリだったことが心の傷のようになったためか、所謂中肉中背の太ってもない痩せてもない普通の体型を「痩せている」と言い、ちょっと太めの体型を「ちょっと痩せている」と言い、太めの体型を「丁度良い」と言うようになりました。
　なので、母の目から見た私は、決して太っていない丁度良く見えるようで、旺盛な食欲もちょうどよく見え、モリモリ食べる私のことを見て、未だに微笑ましい笑顔を浮かべます。
　なので、我が家の子供たち・孫たちのちょうどいい食欲やちょうどいい体型を見ると、「もっと食べないと、もっと太らないと」と心配そうな顔をします。

　でもこれが、親心なのでしょう。
　子どもの成長の程、親にとって心配なことはないように思います。

Part One

　そんな母の親心が理解出来るような時が、私にも訪れました。
　２１年前の長男の誕生です。

神学校３年目に入ったばかりの３月第５週目の日曜日の夜に、長男が生まれました。

先週お話ししました教会の日曜日の伝道師としての働きを早めに切り上げ、直ぐに病院に駆けつけ、妻の出産に立ち会いました。
そして遂に、２００３年３月３０日、ぴったり３０００ｇの長男が生まれました。
３，３，３と、３が並んでいました。
生まれてすぐの赤ちゃんを見て、自然と、手の指と足の指に目が行きました。
手の指１０本、足の指１０本がちゃんとあることを確認して、看護師さんから生まれたばかりの赤ちゃんを抱っこさせて頂き、妻が出産したベッドのすぐ隣に用意された赤ちゃん用の湯船に、長男をプカプカ浮かべながら気持ちよさそうにしているところ、「アメージンググレイス」（驚くばかりの）を歌ってあげました。
でもあまりにも小さく感じ、壊れてしまいそうだったので、１節だけ歌って看護師さんに長男を渡し、私は分娩室を後にしました。

病院の部屋で３０，４０分ぐらいでしょうか、待っていますと、タオルにくるまれ赤ちゃん用の透明な箱に入れられた長男が運ばれてきました。
そして、ジッと、ただジッと、すやすや平和な表情を浮かべて寝ている赤ん坊の長男の顔をジッと見つめていました。
不思議でたまらず、またかわいくてたまらず、それまで一度も感じたことのない感動と静けさがその場を包みました。
ただず～っと見ていたい気持ちでした。

そんな赤ん坊の長男を見て、先ず一番初めに思い浮かんだのが、「こんな風に生まれてきた赤ん坊を見て、命の誕生を目の当たりにしても、命の創造者なる神の存在を信じられないとは、なんと人は罪深いんだろう」ということでした。
そしてさらに、すやすやと眠っている長男を見て、「早く元気に大きくなあれ。早く言葉を交わしたい。会話をしたい」と思いました。

ところが、長男が生まれて１，２ヶ月たった頃から、アトピーがひどくなってきて、本人も痒くて痛くて辛そうで、私たち夫婦にも親として大きな心配の種となりました。
教会の方の紹介で、アロマオイルを湯船に入れて体や顔を洗って上げたり、ミンクオイルを譲り受けて体や顔に塗って上げたり、日本に帰って来てからは、当然病院にも行きましたし、筑波山温泉や那須の鹿の湯に足しげく通ったりと、何とかしてそのアトピーになった肌を直してあげたいと、妻と一緒に苦慮しました。
私よりも、母親の妻の方が、お腹を痛めて生んだ我が子の痛みを自分の痛み

のように感じていたと思います。
　幸い、成長するにつれて良くなってはいきましたが、色々ある子供の育児を通して、子供の成長を心配する親心を神さまから教えて頂いたように思います。

Part Two

　今日のメッセージをなぜこのような話から始めたのかと言いますと、今日の聖書箇所エペソ書４：１６の言葉をじっと黙想していますと、神様の親心が見えてきたからです。

　先週、先々週に引き続いて同じ聖書箇所ですが、先週は「からだを建て上げる」、先々週は「子どもでいる幼稚さからの脱却」ということについて学んできましたが、改めてエペソ書４：１２－１６をじっと思い巡らしてみますと、親が子の成長を見守るような神の姿が感じられました。
　ここに表れている神の姿は、「愛する我が子を心配と愛情をもって、期待しながら見つめ待っている親心だ」ということに気付かされたような気が致しました。
　もう一度エペソ４：１６を読んでみます。

エペソ人への手紙４：１６（パワポ）

　生まれて来てすぐの我が子の手の指と足の指を確認し、肌が荒れて痒みと痛みに苦しんでいる我が子を見て心が痛み、また中々食べてくれず育っていかないように見える我が子の姿に心苦しく思い、悩み、何とかしてあげたいと思う親心が表れているように感じました。
　からだ全体が、あらゆる節々を支えとして組み合わされ、つなぎ合わされ、それぞれのからだの部分がその分に応じて働きながら成長するために、成長するために愛を注ぎたいし、注いでいる神のお姿が見えてこないでしょうか？
　成長することを願っておられる、期待しておられる、望んでおられる、待っておられる父であられる神の親心が見えてこないでしょうか？

　聖書は、天地万物をお造りになった神のことを「父」と「父なる神」と記しています。
　御子イエス様も、天地万物をお造りになった主なる神様のことを「父」と呼びました。
　そして主の祈りを教えて下さった際には、「『我らの父よ』と告白しながら祈りなさい」と教えて下さいました。
　使徒パウロに至っては、「父」という言葉よりも砕けた「アバ」と神さまに叫ぶのが、私たちクリスチャンと神さまとの関係だと言っています。

ガラテヤ人への手紙４：６－７（パワポ）

「アバ」という言葉は、父というよりも、パパ、父ちゃん、おっとうのような砕けた呼称です。
昔「子連れ狼」という時代劇がありましたが、主人公の拝一刀のことを息子が、もはや、お父ちゃんのおとうも省略して「ちゃん」と言ってましたが、そんな砕けた呼び方が、「アバ」ですね。

言語学的にも、子どもが生まれて来て一番初めに発音する言葉が、「ま～」とか「っぱー」だそうです。
そこから、お母さんを表す言葉が「ま～ま」、韓国語では「おん～ま」になり、お父さんを表す言葉が「ぱ～ぱ」、韓国語では「あ～っぱ」、そして聖書のアラム語では「あっば」ですね。
つまり、パウロの言う「アバ」という父を表す言葉をもって神に叫ぶとは、生まれて来て初めて赤ん坊が口にする言葉で語り掛けることの出来る、愛情深い親のような存在が父なる神だということです。

神さまと私たちの関係は、徹底した親子関係ですね。
人間の親は欠点の多い不完全な存在ですが、アバ父なる神様は、完全な愛をもって私たちのことを見守り、与え、期待し、待ち、導き、命を懸けて関りを持って下さる親なるお方です。

ここで一つ疑問に思っておられる方もいらっしゃるかもしれませんが、父なる神は、母なる神ではいけないのかという疑問ですね。
聖書にはちゃんと、母としての神の姿も記録されております。
ある意味、有名な聖書箇所かもしれません。

イザヤ書４９：１５（パワポ）

「母親がお腹を痛めて産んだ我が子を忘れることは先ずないけれども、もしあったとしても、わたしは忘れない」と、母の子に対する並々ならぬ思い入れに勝る母性愛が、神様に御有りだということが記されています。
これ以外にも、例えばイエス様が、終末の前に必ず起こる自然災害や戦争や偽キリストの現れのことを、「これらはすべて産みの苦しみの始まりなのです」と仰ったように、神のなさる最終的な救いの御業を、母親が子を出産することに例えたりもしています。

即ち、神は父なる神なのか、母なる神なのかが大事なのではなく、親心をもって、私たちを生み、育て、与え、導き、守り、癒し、泣き、赦し、命を捨て、神としての名分のすべてを掛けて愛しておられるということです。
愛とは、第一コリント１３章にありますように、忍耐であり、寛容であり、損得勘定の入る余地は一切なく、信じ、待つことです。
神さまは、そのような愛の親として、私たちに関わって下さっております。

Part Three

聖書に登場してくる神の民たちは、そんな親なる神と子なる自らの関係をその生涯をかけて、体験し、体験させられました。

モーセもそうですし、ヨセフもそうですし、ダビデもそうでした。

このお三方すべて、聖書には、その幼き頃から年老いて亡くなる天の御国に召されていくその時までのことが記録されています。

それらの記録を見ますと、あたかも、親が生まれてきた子どもたちの育っていく姿を写真に残してアルバムを作り、時にはしかめっ面や「写真なんか写りたくない」という反抗的な姿まで含めて、いつでも、いつも、その素晴らしい思い出を振り返られるようにしているかのように見えます。

まず、モーセから見てみたいと思います。

出エジプト記１：２２－２：１０（パワポ）

「生まれて来るすべてのヘブル人の男の子を殺さなければならない」と、エジプト王ファラオの勅令が発せられた緊迫した社会情勢の中、モーセは、ヘブル人の男の子として生まれてきました。

生まれてすぐにナイル川に投げ込まれてしまう運命にあった命でしたが、その運命に逆らって、不思議な神様の御守りの中、その命が救われ育まれて行きます。

まるで、私たち罪ゆえに滅びゆく魂が、イエス・キリストの贖いによって救われ、永遠のいのちを与えられ、神の国に入ることを譬えているかのようにも見えます。

モーセは生まれてから４０年間はエジプトの王子として育ち、育まれました。

当時の最高学府、権力、物質、技術の粋が集められたエジプトで育ち、王子として生きてきたわけですから、彼なりのこの世における成功体験、プライド、自慢げな姿が当然ながらあったことでしょう。

もちろん、この時得た人生経験や学識は、後にイスラエルの民たちを導き出す時とモーセ五書を記す時のために神様が備えさせたものであり過程でありましたが、神様が期待し、望んでおられるようなキリストにある成熟した一人の大人とは違う姿でした。

それゆえに、自分にある力をもって思い通りに事を運び人を動かそうと、人を殺めてしまいます。

そこからの４０年間のモーセの生き様は、人間的な目から見れば、死んだような人生でした。

しかし神様は、そんなモーセの生き様の中に、神が望まれる一人の成熟した大人へと成長させるための素地を造っておられました。

それが、８０歳になったモーセの姿です。

４０年前のモーセからは、決してそんな言葉が口を突いて出てくるようなことは想像も出来なかった言葉が、８０歳のモーセの口を突いて出てきます。

出エジプト記３：１１（パワポ）

「私は、いったい何者なのでしょう。イスラエルの子らを導き出さなければならないとは。」
４０年前のモーセは、自分の力で、自分の思いでイスラエルの民たちを導き出そうとしましたが、４０年後のモーセからは、自らの弱さと自らの心の貧しさを神の前にあって吐露することしか出来ませんでした。
しかしこれこそ、神様がモーセという人を造り上げた素地ですね。

そして、そんなモーセをどこまでキリストにある成熟した大人へと、人として神の品性を回復させるところまで成長させるかと言いますと、

民数記１２：３（パワポ）

柔和という品性は、ガラテヤ書５：２３にある聖霊なる神による御霊の実です。
神さまは、赤ん坊だったモーセに御霊の実が成るところまで導いて行かれました。
これが、神にとっての成功であり、期待の成就です。

人間の、または、この世の中の成功とは大分違うかもしれません。
むしろ、エジプトの王子であった時こそ、この世的には大成功を収めていたことになるかもしれません。
でもそのような成功は、神の目から見たら成功ではなく、むしろ、本当の成功に至るための過程でしかありませんでした。
この世における失敗という経験を、空しいという経験を、満たされないという経験を、渇くという経験を、意味がないという経験をさせ、本当のものを、真実のものを、まことに価値あるものを、そして、神を知るという、神に生かされるという、神の品性の回復という真の成功を頂くための神の訓練期間でありました。

金銭を愛する必要のない、今与えられているものを、今持っているものを満足出来る柔和へと、御霊の実である柔和へと導かれて行くことが神の望み、期待しておられる成長、成熟ですね。
荒野で、テントを張った生活を４０年間も続けている集団ホームレス状態ような中だけれども、そこが神の国となり、恵みの場となり、人が自分の子を抱くように抱いて下さった父なる神様の懐を感じられる成長が、神にある成功でした。

そして、その成功へとモーセは導かれて行きました。
その成功を手にすることに、比類なき喜びを、感謝を、栄光を告白出来ました。
モーセの見ている世界が、神の御手、神の御国、神の喜びに変わりました。

そうしてモーセは、普通では有り得ない御霊の実の体現を民数記１４章でします。
「なぜ、私たちをエジプトの奴隷から解放したのか」と訳の分からないいちゃもんを付ける全イスラエル民族の前に、「あなたがたは、なんて不届きなことを言うのか！　神の前にあって悔い改めなさい」と当然言っていい言葉を口にすることなく、「もしかすると私は、神の前に高慢だったかもしれない」と、難癖を付けることでしかないいちゃもんでさえも我が事として真っ正面に受けとめ、遜って、不条理極まりない民の達の前にあべこべにひれ伏しました。
これは、私たち人間にとって本当に難しいことですね。

民数記１４：１－５（パワポ）

モーセが見ていたのは、人ではありませんでした。
人が自分の子を抱くように抱いて下さった神の御手、神の御国、神の喜び、そして、神のあわれみと慈しみでした。
モーセは、どんなことにおいても神を見上げる者へと成熟させられ、どんな問題も神と自分との関係における問題として捉えられるようになっていました。
人のせいにはしません。

Part Four

ヨセフもそうでした。
青少年の時期に、ヨセフは神さまから特別なビジョンを与えられました。
しかし、その与えられたビジョンを祈りと御言葉の内に心に抱き、育み、謙遜にその実現のために生きるというような事は、幼稚であったヨセフには当然ながら出来ず、兄たちにそのビジョンを自慢げに語ってしまうという軽はずみさがありました。

もちろん、純粋だったんだと思います。
でも、その純粋さが人を傷つけてしまうという思いにまでは至らず、配慮までは備わっていませんでした。
そんなヨセフを神さまは、父として親として、その人生に介入されながら、キリストにある大人として成熟させます。
その純粋さを伸ばしつつ、そして人への配慮と、自分の能力ではなく神の御手を告白出来る者へと成長させていきます。

兄たちの恨みを買ったヨセフは奴隷として売り飛ばされ、１３年間苦境の中

を生きました。
　でも、その苦境の中にあっても、神から与えられたビジョン御言葉を信じる純粋さには磨きがかかり、人への配慮と人の痛みを知れることには成熟が与えられました。
　１３年前は、「お兄ちゃんたちが、僕の前にひれ伏すようになる」なんてことを軽々しくも口にしてしまい、兄たちに恨まれるようになってしまいましたが、１３年間神様に導かれたヨセフの口からは、こんな言葉が出てくるようになりました。

創世記４１：１６（パワポ）

「私ではありません。神が」という言葉が自然と、権力者の前にあっても、その口を突いて出てきます。
「僕が、僕が」と言っていたヨセフの姿は、もうここにはありません。
　さらには、生まれ来て自分の子供に付けた名前にも、神への信仰告白が表れています。

創世記４１：５１－５２（パワポ）

　私の労苦を際立たせ、私の苦しみを何となく自慢げに語ったり誇るのではなく、「神が、神がしてくださったと、神があわれんでくださった」と、神の恵みと神の御手を見出す告白を愛する我が子への命名にまで表しました。
　そして、極めつけはこの言葉です。
　以前も見たと思いますが、

創世記４５：４－８（パワポ）

「自分を責めたりしないでください。人の憎しみや憎悪や怒りを遥かに越え、それさえも用いて、神が遣わし、神が救い、神が用意され、神が備えさせたのです。実に神がなされたのです」と、ヨセフは告白します。
　その人生に、その歩みに、天変地異や国家権力に至るまで、そのすべてが神の御手の中にあり、私たち人間が頼るべきお方は、父なる神のみであるということを告白しました。

　そしてヨセフには、何と言っても、「赦す」というキリストの身丈にまで成熟させられた者にのみ実る実りが、実りました。
　これこそ、彼の人生における神様の目的です。
　エジプトの実質的権力者になったという社会的成功に焦点があるのではなく、神の愛のうちに、神の人として成長したということが父なる神様の焦点です。

　ダビデもそうです。

石と石投げをもって巨人ゴリアテを打ち倒したダビデが、信仰者としての信仰の頂点ではなく、サウルから逃れ、王にはなったものの、バテシェバとの姦淫を犯し、その夫ウリヤを戦死させ、そして晩年、実の息子アブサロムに謀反を起こされ、王権が引きずり降ろされ、王宮を追われ逃げ惑い、国民から呪いの言葉を浴びせられた時に告白した言葉にこそ、神様が、ダビデをキリストにある一人の大人へと成熟させた姿が、信仰者としての姿が表れていると思います。

サムエル記第二１５：２６（パワポ）
サムエル記第二１６：９－１２（パワポ）

もはやダビデは、自分が王に返り咲くなんていう目に見えるけれども儚い栄光に価値を見出す者ではなく、「神が自分を退けなさるならば、神の御旨神のご決意に従う。神が人を用いて自分を呪わせようとなさるならば、それさえも受け入れる。それでも、神にこそ救いがあり、神こそ我が神であり、神こそ信頼に値する唯一の父なるお方であり、神のみが良いことをなさる、すべてを益として下さる唯一全知全能なるお方である。私はその方の前を行くことはしない。私はいつでも、その方の後ろに従って行くのみだ」と告白します。
エペソ４：１４に、

エペソ人への手紙４：１４－１５（パワポ）

とありますが、正にダビデは、「もはや子どもではなく、愛をもって真理を語り、あらゆる点において、かしらであるキリストに向かって成長すること」のみに、人生の関心、照準、目的がありました。

Conclusion

神さまは私たちを見放すこともなく、見限ることもなく、見捨てることなんか一切なく、神を信じる者のみならず、まだ神を信じていない信じられない方々にも、親心をもって熱心に導き、見守り、いつの日かその神の愛情の前にひれ伏し、感謝し、賛美を献げ、栄光を帰す気付きが来ることを待ち望んでおられます。
そして、その日が来ることを、今まさに練っておられます。

私たち人間は、まことの神を知るならば、主イエスを信じるならば、本当の意味で孤児ではありません。
しかしそうでないならば、孤児のような恐れや不安や怒りややるせなさや悲しみや空しさや渇きに苛まれ、恐れる必要のないものに恐れを抱きながらこの世を生きて行くしかないでしょう。

今こそ私たちは、親心をもって深く関わって下さっている父なる神を、その

人生に認めるべき時でしょう。
　最後に一箇所、御言葉を読んで終えたいと思います。

箴言３：１１－１２（パワポ）

　お祈りいたします。
　祝祷：エペソ４：１６